【インタビュー】

亀山琢道さんに聞く

愛知大学文学部文学科中国文学専攻　昭和 45（1970）年卒業　**亀山 琢道**
聞き手　**石田 卓生**

愛知大学入学の頃

――　よろしくお願いします。亀山先生は豊橋の臨済寺[1]の住職をされ、また臨済宗東福寺派の宗務総長も務められた僧侶でいらっしゃいますが、1966 年に仏教とは直接関係のない愛知大学の文学部文学科中国文学専攻に入学されています。先生は、どうして愛知大学で中国について学ぼうとされたのですか。

亀山　何か向学心に燃えていたわけじゃなかったです。

――　中国に対して興味があったとか、あるいは憧れがあったのですか。

亀山　まあ、そのような感じでした。それに、私はお坊さんになるのが嫌だったんですね。高校まではここ（臨済寺）を継ぐ気はなかった。だから大学では臨済寺から離れたかった。親父は、大学は花大（花園大学）に行けと言ったんです。それか、家から通える範囲と。先代は、なにしろ逃がさんように逃がさんようにしとったんやろうな。

それでも、昔の大学入試には一期校と二期校とありましたが[2]、私は一期校では金沢大学を受けに行きました。そしたらね、入試の時期はもう真っ白、雪で、それにびっくりした。テスト会場は昔のだるまストーブをガンガンたいていてものすごく暑い。風邪をひいてしまって、さらに暑いからのぼせてぼぉっとしてしまって試験どころではなかった。本当に暑くてもうろうとした。その時、時習館[3]から一緒に受けに行ったのもいたけれど大半はうまくいかなかったね。

それで一期校がだめだったから二期校となるけれど、そうなると学校の先生になる学芸大（愛知学芸大学：現・愛知教育大学）とかになってしまう。けれども学校の先生になろうという気持ちもなかったし、どうしたものかなと考えて愛知大学になった。あそこは中国関係が非常に有名な大学だっていうことは知っていました。経済学をやるとかは興味なかったんですけど、中国研究で有名な愛知大学で勉強をするなら、中国のことをやってみよう思ったんだよね。それで中国語をやってみたいなとなったんです。

---

[1] 臨済寺　愛知県豊橋市にある臨済宗東福寺派の寺。1645 年、九州杵築の宗玄寺を移し、後に萬年山臨済禅寺と改められた。明治の廃仏毀釈、太平洋戦争での豊橋空襲で大きな被害を被るが復興し現在に至る。江戸時代の茶人山田宗徧ゆかりの寺院であり、茶道宗徧吉田流の本部が置かれている。

[2] 一期校・二期校　1949 年から 1978 年まで行われていた国立大学を二つのグループに分ける入試制度。

[3] 愛知県立時習館高等学校。

中国語漬けの学生生活

――　当時の愛知大学は念書[4]をかなりやっていたと思います。亀山先生も、最初から参加されましたか。

亀山　やってました、やってました。朝の念書は、やるのが当たり前だった。あれはみんな先輩が教えるんだよね。学年が上がると今度は自分たちが教える側になった。

――　念書は週に何回くらいしていたのですか。

亀山　毎日ですよ。朝、授業が始まる前に1時間くらいはやったかな。

――　どのような内容を。教材は何を使われていたのでしょうか。

亀山　教科書を主にやった。プリントも使ったりした。

――　念書は何人ぐらいでしていたのですか。

亀山　教室にいっぱいというわけではなかったけど、それに人数はあまり気にしていなかったな。1年生、2年生の頃はまだ教えられる側で、3年生から教える側でした。

――　それは中国語の会話サークルのようなところが主催しているのですか、それとも中国文学専攻の学生たちが中心だったのですか。

亀山　中文（中国文学専攻）は私たちの頃は12〜3人の学生がいたけど、その前は4年生に草場さん、3年生に草場さんと結婚した明子さんしかいなかった。中文とかサークルとか関係なく、中国語を勉強する者が集まっていた。

――　先生より前の卒業生の方も毎日念書をやられていたそうですが、90年代に入ると週2回程度となり、2000年代に入る頃には消滅してしまったようです。

先生より前の時代の念書に参加してらした学生は中国語劇もやっていたそうですが、先生も中国語劇をやりましたか。

亀山　そういうのは私の頃はなかったです。

――　こちらの臨済寺は愛知大学の中国語の主任だった鈴木択郎先生[5]のお宅がすぐ近くですよね。ご入学される前から、あそこに愛大の先生がいるといったように知っていたり、近所づきあいのようなことがあったりとかあったのでしょうか。

亀山　入学する前は知らなかった。入ってからだよね。この辺りは愛大の先生が結構いらした。択郎先生以外にもチャン（張）先生[6]や池上先生[7]などもいらっしゃった。そういう先生たちがいて恵まれとった。択郎先生の所には、ちょこちょこちょこちょこ来いと言われて、よく遊びに行っとったわ。チャン先生の所はさ、中国料理を教えていらしたから、それでたくさん料理ができるから、学生がよく集まって呼ばれるんです。そんな風で、先生たちと私たち学生というのは教室以外でもいろいろつながりがあった。

---

[4] 念書　愛知大学の前身校・東亜同文書書院以来続いた学生による中国語勉強会。朝、授業前に先輩が後輩に中国語を教えた。

[5] 鈴木択郎（1898〜1981）中国語学者。東亜同文書院卒（第15期）。戦前は母校の中国語教授として活躍し、戦後は愛知大学の創立運動に参加してその教授に就任すると東亜同文書院時代から取り組んできた中国辞典編纂に尽力し『中日大辞典』（愛知大学、1968年）を完成させた。1977年勲三等瑞宝章受章。

[6] 張禄沢（1920〜1996）中国安徽省寿県の人。北京私立中国大学文学部卒。1955年、愛知大学中国語講師兼華日辞典編纂員。1969年、ドイツに渡り、ノルトライン＝ヴェストファーレン州立ルール大学ボーフム講師。

[7] 池上貞一（1918〜2014）中国研究者。東亜同文書院大学（第40期）に学び母校の教員となる。戦後、愛知大学教授、同大法経学部長。

チャン先生にも本当いろいろお世話になったな。

――　入学されて最初の中国語の授業はどなたが担当されていましたか。

亀山　今泉先生[8]と桑島（信一：書院 29 期）先生、内山（雅夫：書院 34 期）先生でした。

――　その頃は日本人の先生と中国人の先生がペアで授業をされていましたか。

亀山　教養（1〜2 年生）と専門（3〜4 年生）では違ったかなあ。今泉先生が張先生と一緒にというのはなかったです。今泉先生などは 1 人で授業をされてました。張先生は択郎先生と一緒にやっておられた。

――　先生の頃ですと使われていた教科書は愛知大学華語研究会『中文会話教科書』（大安、1964 年）でしたが、今の教科書よりずっと難しいように思います。先生より前の方は 1 年生では終わらなかったとおっしゃっていましたが、先生の頃も同じように 1 年生と 2 年生の 2 年間をかけてやられていましたか。

亀山　教科書はそれでしたが、2 年間かどうかというのはどうだったかな。

――　授業はどのような様子だったのでしょうか。東亜同文書院以来のやり方ですと、まず先生の朗読と説明があって、それからみんなで朗読し、念書とあわせて丸々覚えていくというものですが、先生の頃も同じでしたか。

亀山　そうですね。

――　あと、例えば中国語の新聞を使うとか、そういった教科書以外の教材はありましたか。

亀山　そういうのはなかった。

――　先生は中国文学専攻ですので、第一外国語が中国語だったと思います。第二外国語は英語を選択されたのでしょうか。

亀山　多分、そうだろうね。ただ、全然そんなことは記憶にないな。もう本当にぎっしり中国語だったね。

――　学内には張禄沢先生がいらっしゃいましたが、張先生以外の中国の人との交流だとか、中国語の弁論大会に参加されるといった中国に関連する学外での交流や活動はあったのでしょうか。

亀山　愛大以外の中国関係の人と接触した記憶はないな。

――　その時代で中国を勉強しようという人の中には、毛沢東主義うんぬんといった政治的意識の強い学生も多かったと思いますが、学内の雰囲気はどうでしたか。

亀山　いない、いない。中文にはいない。ただ、私たち中文の授業にヘルメットをかぶり、マスクを付けて顔を隠したのが「授業をボイコットしろ」と入ってきたことがあった。今からすればようやったと思うんだけど、それに向かって、「何しに来たんだ。俺たちは中国語を今勉強しに来とる。俺たちの勉強の邪魔をするな」と言ったよ。

――　かなり激しい学生運動があったのですね。

亀山　そういうことをしてる人たちは結構お互いにやり合うもんだから、豊橋市内でも、それこそ大けがしたりする連中もおっ

---

[8] 今泉潤太郎（1932〜）中国語学者。1955 年愛知大学文学部文学科中国文学専攻卒。同大教養部教授、同大現代中国学部教授・同学部長、同大東亜同文書院大学記念センター長、同大中日大辞典編纂処（後、編纂所）編集委員長・同編集主幹を歴任。『中日大辞典』（愛知大学、1968）編纂に従事し、増訂版（大修館書店、1986 年）及び増訂第二版（大修館書店、1987 年）、第三版（2010 年）を出版した。2012 年瑞宝中綬章受章。

たんだよ。けれども、私ら中文の授業にはあまり入って来なかった。

――　中国文学専攻のクラスは勉強をしているから、と。

亀山　俺たちは中国語を勉強してんだよ。その邪魔をするなら授業料を返してくれってね。

――　学生運動が盛んな時代といってもいろいろな学生がいたのですね。

亀山　私たちの頃の中文の十数人はそうでした。

――　そうして 3 年生に上がり、原書講読のような専門的な授業になりますが、どのような様子でしたか。先生より前だと、例えば愛大の後に法政大学へ行かれた尾坂徳司先生[9]は『論語集注』を訓読する授業もあったと聞きます。

亀山　古い時代の文章でもレ点打ったりするような訓読するいわゆる漢文はなかった。

――　ゼミや卒論ではどのようなものを扱ったのですか。

亀山　現代文学の方で茅盾（マオトゥン）[10]なんかをやった。授業はずっと択郎先生とチャン先生が来るのが多かった気がする。そうやって勉強して、1 年生の時は授業料を払ったけど、2 年生は半額でいいよとなり、3 年生と 4 年生の時は授業料はもういいよとなった。

――　成績優秀で特待生でいらしたわけですね。

僧侶の道へ

亀山　最後は卒論で文学会賞[11]を取った。中文では初めてだったそうです。それで 3 年生の時に択郎先生から、どこでも推薦するから大学院に進めと、中国関係の所だったらどこでもいいから、そこで勉強していずれは戻ってきてくれと言われた。それこそ天にも昇る心地だったもんね。それで、弟がおるんだけど、お前がここ（臨済寺）を継いでくれてって言ったら、絶対に嫌だって言うんだ。お寺も誰かがやらなきゃいけないしと択郎先生に相談した。岐阜の美濃加茂にある正眼短大[12]というところがあって、2 カ年勉強して卒業すると修行道場の 1 カ年分の証明書がもらえる。あと四年制大学を出ていると修行道場の 1 カ年分の証明書がもらえる。臨済寺だと 3 カ年の修行は必須で、そうでないと住職ができない。だから、愛大を卒業しているからそれで修行 1 カ年分、正眼短大に行って修行 1 カ年分、あとは道場で 1 カ年修行すると 3 カ年修行したことになるから、そうした後に大学院に行かせてもらいたいとお願いしたら択郎先生が「いいよ」って言ってくれたもんだから正眼短大に行ったんだ。

――　正眼短大に行かれる時は中国研究に戻ってくるおつもりだったのですね。

亀山　正眼短大に入った所までは、そういう計画通りだったんだ。ただね、正眼寺[13]の

---

[9] 尾坂徳司（1920～1997）中国文学者。北京大学卒。東亜同文書院大学教授、愛知大学教授、法政大学教授を歴任。

[10] 茅盾 Máodùn（1896～1981）中国の小説家、評論家。中国近代文学成立に大きな役割を果たした文学研究会の発起人の一人として活躍し、写実主義を唱えて『子夜』などを発表した。

[11] 愛知大学文学会賞：文学部の優秀な卒業論文に授与される。

[12] 正眼短期大学（しょうげんたんきだいがく）。1955 年、臨済宗妙心寺派正眼寺が設立した私立短期大学。

[13] 正眼寺（しょうげんじ）　岐阜県美濃加茂市にある臨済宗妙心寺派の修行道場。開山を関山慧玄（かんざんえげん）とする。

梶浦逸外老師[14]が妙心寺[15]の管長[16]になられて、正眼寺の方は副住職の谷耕月老師がおられて、私は最初、谷耕月老師[17]についたんです。そしたら、管長の所に隠侍（いんじ）といって身の回りの世話をする役目で先に行っている人の調子が悪くなってしまったから誰か代わりの者が行かなきゃいけないことになった。それで私に白羽の矢が立ってしまった。12 月頃だったかな。私は、もうあと 3 カ月で修行期間が 1 カ年となるので、その後に大学院に行こうとしていたところだった。それなのに隠侍で派遣されたら、隠侍は 1 カ年と決まっていたから、1 年長くなってしまう。そうすると、今までずっとやってきたことが全部水の泡だ。それはもう非常に困るわけ。こっちは。正眼寺の上役の人に呼ばれて「行くように」と言われたけど、私は「行きたくない」と言ったんだ。そしたら、父親の意向もあるだろうからと電話をかけるようにと言われた。電話に父親が出て、その話を伝えたら、でっかい声で「逸外老師の所へ行って修行ができる。それだったら行ってこい」と。そんなあ、と思ったよ。私の大学院に行く計画を親父だって知っているはずなのに。逸外老師の所に行ったら、少なくとも丸一年はそこにいないといけない。すると択郎先生との約束が狂っちゃうんだ。修行道場にいたら語学の勉強をする時間がまったくない。短大での 2 年と修行での 1 年の合わせて 3 年というのは、もう語学にとってはぎりぎりだわ。語学は離れていると離れていただけ耳がもう聞こえなくなってくるからね。それなのにもう 1 年なんて。でも、もう行くしかなかった。それで翌日にはもう隠侍として派遣された。

――　次の日にもう行かれたのですか。

亀山　そうだよ。修行僧なんてのは何も持っていないから。だから、明くる日から京都に行った。親父としてはうれしかっただろうけど、私としてはね、めちゃくちゃ面白くないじゃん。それまで修行もしていたから。耕月老師に参禅して、一対一で問答するわけだけど、最初の頃は鼻にもかけてくれない。見解[18]を言っても鈴をチリンチリンと鳴らされて帰されるだけ。一言もなしや。それが、やっとチリンチリンの後に頭を下げとると竹篦[19]でパパパッンとたたかれるようになった。そのパパパッンというのは、「よし、その方向で進め」という励ましなんだわ。それを貰えるようになって、どうにか目が開くやろうと思って一生懸命やっていたところだったんで、そりぁ、もう本当にやる気がなくなったね、あの時は。それで京都に行っても半年くらいは逸外老師からチリンチリンチリンチリンと相手にしてもらなかった。でも、そっから逃げたら、全てだめになる。それで、ある時、座禅しとったんや。やることになっとるのだから、やっとっただけだったんだけど、ちょっと待てよと思

[14] 梶浦逸外（1896〜1981）僧侶。臨済宗大（現・花園大学）卒。臨済学院専門学校（現・花園大学）学長を経て正眼寺住職、臨済宗妙心寺派管長。正眼寺短期大学を設立し初代学長を務めた。

[15] 妙心寺。京都市右京区にある臨済宗妙心寺派の大本山。室町時代初期、花園上皇が離宮に関山慧玄を招き寺院としたことに始まる。

[16] 臨済宗妙心寺派管長は臨済宗妙心寺派の最高責任者。

[17] 谷耕月（1931〜1994）僧侶。梶浦逸外に参禅。後に正眼寺住職、正眼短期大学第 3 代学長。

[18] 見解（けんげ）は師家（師匠、先生）より与えられた公案（問題）に対する修行僧の解答。

[19] 竹篦（しっぺい）は師家が修行僧の教導に用いる竹製の杖状の法具。

ったんだ。その日、来られたある老師、有名な方なんだけど、その方と逸外老師、耕月老師に思いを致していたら、いわゆる老師という立場の方が三者三様なんだ。修行ができたら霞でも食べとるような清廉潔白になると自分はイメージしとったんだけど、それとは違うなと思ったんだ。そう感じなかったらきっと愛大に帰ってきとったんだろうけどね。そこでね、修行って今まで自分は何をやってきたのかなと。これはいかんなと。二兎追うものは一兎をも得ずやないけど、こっちのやつもあっちのやつもって、もたもたやっていたら、それで終わっちゃうわなって思った。いずれ臨済寺に座って学校の先生をやってなんてことを俺ができるやろか。自分はそんな器用な人間じゃないわ、と。こんな状況で帰ったら檀家さんのみなさんに嘘つくになる。これはいかん、本気になって修行し直さなきゃいかん、よし、やるぞとなったんだ。

逸外老師はやっぱりすごいなと思ったのが、それから 2 日ぐらい後に逸外老師に参禅したら、もう本当に背中の骨が折れるんじゃないかっていうくらいにバンバカに叩かれて、「よし」と。それで次の問題をくれたもんだから、それで帰ろうとしたらね、「お前、なんで帰るんや。すぐ答えを出せ」って。それで答えたら、「お前は三昧[20]を得たって言うけれど、三昧入りの三昧知らず、三昧に入った者がどうして三昧がわかったと言うのだ。三昧に入っとれば三昧なんかわかるわけがない」と、それで「三昧をどうしてわかったんだ」と聞かれてさ、答えられんかった。そしたら「まだ足りん」って言って追い出されたわ。逸外老師に言われて本当に目が覚めたね。これは修行をやらなきゃいかんと。すごいなと思ったのは、私の心の中が変わったのが見えるんだ、どっかでわかるんだということ。あのレベルの人たちはそういうことを見とるんだ。

――　それからは修行の方へと。

亀山　そこからはいよいよ深みにはまっていって、3 年くらいたった時にまだまだ修行しなきゃいけないと思った。しかし、これではとてもじゃないけど択郎先生との約束を私は果たすことはできんわと思って先生の所にお邪魔して、こういうことで修行をしていて、これだけ語学と離れてしまったので先生とのお約束を果たすことができませんのでお断りさせていただきますと謝りました。先生は「そういう修行も大切だし、惜しいけれど、仕方ないな。そっちの方を励んでくれ」って。それで、結局、それから 10 年くらい修行した。先生に誘われた時は本気になってやろうと思ったんだけどね。

鈴木先生から学んだ中国

――　その頃、鈴木先生は『中日大辞典』の編纂もされていましたよね。

亀山　私が学生の時も辞典はだいぶやっていた。私もアルバイトで辞書のお手伝いをした。正門の脇にあった辞典編纂処で。

――　愛大には戻らないと決断されてから鈴木先生や中国との関わりはどのようでしたか。

亀山　修行の時は 10 年ほどほとんど家には帰ってこなかった。お盆や寺が忙しい時には帰ってくるけど、先生とは挨拶をちょ

[20] 三昧（ざんまい）は仏教用語。心を一つの対象に集中している状態を言う。

こちょこっとするぐらい。

中国との関わりだと、私の臨済寺の本山は京都の東福寺というお寺なんだけど、開山された円爾（えんに：1202〜1280）様は中国の浙江省にある径山（きんざん）萬壽禅寺で修行されていたから中国とも関わりがあった。その萬壽禅寺とはずっとつながりがなかったけど改革開放の後に交流するようになって、その復興を東福寺は援助した。その関係で向こうに行った時、愛大で中国語をやっとったもんだから中国語をちょこちょこっと話すとびっくりされるわ。

――　発音がいい、と。

亀山　そうね、「好像中国人」（中国人のようだ）とかね。それで「在爱知大学学习的」（愛知大学で勉強しました）って言うとね、向こうの連中も愛大のことを知っとる。

――　鈴木先生が作られた『中日大辞典』を出版したということで愛知大学は中国で有名だったそうです。鈴木先生などに関する資料などは何かお持ちでいらっしゃいますか。

亀山　修行で 10 年以上ここにいなかったし、写真などもないな。

択郎先生とはね、毎年夏の頃だったかな、あっちゃこっちゃ行っとった。ゼミとかいうのじゃなくて、中文の連中で泊まりがけで。岐阜の下呂の方とかに行った。あれは誰が企画したのか知らんけど何回か行ってる。

そんな学生時代は本当に中国語漬けだったね。張先生の専門の授業だと択郎先生が一緒に来られるじゃん、それで「じゃぁ、授業始めるよ」と言うと後はずっと張先生の中国語だった。

――　東亜同文書院では中国人教員と日本人教員がペアを組んで授業をしたそうですが、それと全く同じなんですね。

亀山　3 年生くらいになるとさ、質問しようとしても、質問も中国語じゃないとだめなんだ。そりゃぁ必死になってやった。

――　鈴木先生など東亜同文書院出身の先生が、東亜同文書院時代のことや上海のお話、中国での体験を話されるようなことはありましたか。

亀山　個人的に話してる中で記憶に残ってるのがある。択郎先生が 1 人で中国を旅行した時、向こうの人とずっと中国語で話していたわけだけど、たまたまはだしになった時、中国人がぱっと先生の足を見て、「あんたは日本人か」と尋ねてきたそうだ。日本人だから「そうです」と答えたんだけど、「なんでそう思ったんだ」と尋ね返したら、「足の指が開いているからだ」と言う。日本人は下駄や草履を履くから足の親指の所が開くけど中国人は靴だからそうならない。

――　鈴木先生のそういった中国での体験というのは文章などで残っていないので大変興味深いですね。今日は、だいぶ長くお時間をいただきありがとうございました。

（2022 年 2 月 3 日　豊橋 臨済寺にて）